

911.3
才
始

胡  
才  
始







序

月もさ日のあるも世界の旅り——  
其陰く舍るものゝが旅なり——  
車なり——尾陽 白梵庵の主筆  
乃ある神の招きよむれ天ハ春ぬのさそ  
戴き地ハ海ぶの白ももこハせくせん途  
三千里を拘り解り心の行りあり世顯る  
名所ハふよ及りんぐれあるけ沼志のさ摺の  
石をさう——白くを海本くの穴雅り油を



はまうく誹諧をかきけあく不謂表くの身合を  
並く此の諸国の佳句を拾ひ集るれを奥羽の  
笠とよぶハ蓋古翁空居士兩師の蹤を追ふ  
その句

湖南負月翁

元文五庚申天臘月

松毳

奥羽笠始

白梵庵

留別辭

馬州

泰山を挾く北海を越るの大義よハ何く  
も川一飯舄浮を暮かろり年一何りさるを  
肥満の身重きよハ川に居るくくのくはよ  
あまひれく四十よハ川の指をまけぬ忽然と  
大喝一笑くく二川の業をけぐる内



はまきく誹諧をわけあくる不謂表くの身合を  
並くあふ諸国の佳句を拾ひ集るれを奥羽の  
筆とよふハ蓋古翁空居士兩師の蹤を追ふ  
そのゆゑ

湖南負月翁

元文五庚申天臘月

松毳

奥羽笠始

白梵庵

留別辭

馬州

泰山を挾く北海を起るの大義よハ何れ  
も川一飯蚌浮を慕かふる年一何りさるを  
肥満の身重きよち川に居るくくのくはよ  
あまねく四十よう川の指をよみぬ忽然と



年あある法師う屈見ゆるも我東行の  
逢もろも等類を遁る海うらま空師よ  
暇を乞かそい修子孫を一平もいおの山  
たうく今ゆりえんハ風雅の俗と道祖神も  
腰や押めん一連中一の餞別よ改陀の  
物くれをまきううう一層よ先達旅を  
何や——

春あよるまあり地よハ足二が

あう然の遊友たりんまうあつらゆる  
酒家う盆とりふけぬりすあ再會の  
事うもはとあひん——おのく鼻あがて  
豆腐の辛うううあきうう——

けろあ妙柱杖よあの昔まをたも

桶挟るの山と分く今川義えの塚とあぬ  
た——も之境よ厥とあひ——獲お今を  
一體古松の主

枝まれの齒うもよ——やまの風



びりー男の跡を莫ふく、櫛く河さふ  
名めーおよはきさふれはあしき  
人面獣心の者ありてや、昔古遊の類を  
捨並ぬりてゑるよ志のひまりのまじを  
かげくもさうらけまらしく白眼  
めくまらり

なり平は遠くさうく清み

岡崎一呂獅子、尻ゆの固くわれハ扉を  
叩く入る主の尻骨たあさく

市中とさるの實居之獅子並を炊ハ我ハ  
摺舟とありーあすは鶏ハ誹談  
行やあし

白梵

あふらの物あを起せ雄の色

接よの妻のむくげあ 呂揪

三日とくちやあさくハ豆あま登り七が  
世のうとをばあ

あ風はあうはくはる 辯と

あ川はあくまは二村の突後と探るよ



老謙は洗志の字ありて埋れし名の  
いみじくも

人もあらず老はなれば梅のふれ

定基をこゝれし力あつて塚を築くは油  
より横切れし入る山又山の懐を分け  
薪こゝるおのこよらばしきられのふたの  
おもひしけあはよきこゝれしあは  
あはれまの旧跡よるしむらじし  
るはあれは教しあのせしものこゝ

は土よ埋れあり

洗志のむかひちるやまの丸

咽の乾くも四方を見向はし西の山腹  
草堂よりくくる石の地帯を安んず例し  
後生の屋よりつらむの礎土をく  
あつては條をさうしむく光をぬせく  
そはし押あはれは七十のくし  
あつては破衣をせりしものとぬく  
あつてはあはれしむく海は誹諧を吐て







陽明平のふ根の園境

潮見坂を越

大石の尻流しより一室

高師凸櫓中をよめる所の橋の跡を

荒井の渡をよめる濱をよめる宿の

屏を残一言坂を越る日も山の

をよる遠府をよめる所、正凡の徒少

をよる南晴館をよめる頭陀をよめる

入るよめるよめるし集り詠る詞の數多

おもしろ例の長尻の病をよめるよめる

晝夜をよめる

池の名の櫻をよめる床をよめる此宿

菊後亭會

金塚の波婆をよめる雄の聲

芝蘭亭八十一の表羽をよめる

札付の鶴をよめるよめる春の水

温槃會をよめる

修羅をよめるよめるぬぬ温槃像



うら東行を聞く山の比まがとぞ  
人の果あひ—といふ心

茶のとりか一人又ふり春の由

奥羽の長江をかくがう指おる目數よ  
勢さう杖笠そくよ立おるよ從信連の  
みねよ衣をぬく

りまおの—よ目や船を

餞別畧

連中からうと云ふおと送うくおれぬ

—は日場よ宿をぬまは—は雨催—

あ—とらうおと—山をうと—作夜の

中—の悪—かき籠よおる—と圭の

さ—と—行脚の身の中—は歩の

なる—と柱杖とあ—はかきおる

足の痛とさ—とらう—はかきおる

—と—はかき籠を

春の命めりりり拾ひと



大井川ハ氷結よ凍り

獺も雪解けぬれ大井川

湯田の亭は入るけ子蕉門のまをん  
者とあかく探の強直あるかほむる

橙の目をれを暇むかまくらな

宇津の山へ鶴の夢ある人よく御ある

びーとらひわく用情腸は志むおらう

十人とうれひはれある乃者の跡をうら

となれゆき

のう雀鳴たはれあらう健の心

丸子とらうよあさなまちよ小山伏め付

まらひく兎角をおれきうーよ刀の鞘

額よううくくまれ上りあるとはらく

之錢よ一句とさくくうくめれハかく

くあらまあらまられく

小角よ孫らうの寝の木の昔心

せらあハ賤機山のまれと見く府中よ

宿もめれハ春女の里三川と渡りく



大内の権車きよら

籠あささしめく藪もや梅の花

しり日ハ舟越舎よ即陀をなほま

山深—椽の下く雉の声

袖—浦をたよ詠く清見寺よの海

夕なまきハ雨よは顔く妻の毛

興津より甲州身延山と志—くた

か入るの地務れ秘ハ猪原よりくよりさ

ませられて長峯—三里と越も両国の境川を

ろろ山十重二十重を廻る—多鳴き十六の

谷空角劔の工く口く佛名と唱へ靴

はゆよ汗を流し—やり—万澤よるぬ

女高年のまぬハ思—一の毛

まのふのもとよらり—草鞋の紐と志れん

四十八ヶ嶽梅の年とる—身延くそぬ

ゆれハ奥の院より七面ヶ嶽と頷れま

下ハ雨降れまひやま雪よりぬきり

高よ因られく是もあへくありま



我輩の重きよ山とてうむゆるきと記念  
きく萬壽一山よき

山とてや七のよ分く雄の志

### 身延賦

夫身延日本ノ鷲山よ一々々此角尖り腰丸く  
茂なり鷹取ヶ嶽と右翼と一七面ヶ嶽  
たよ後耳く七星や所よ備ふ白根ヶ嶽はよ  
まく大なるの裾と川々如一前よ富士川の  
流百布と振ひ梅の平の曙ハ香ひと惣門の

内了導最初説法の御堂よ波木井の信と  
顯一狐町ハ數珠よ名よ一大門の仁王ハ  
大乘の御法を慕ふく鎌倉より宿之かふ  
とや奥の院の石壇よ龍雲臺の汗と流  
祖師堂の舍利よハ在世の心地と感涙余なり  
十一カ部ハ日惠坊の上根と猶一曼爾咒嶺乃  
額よ一山の邪氣と拂ふるなるの松ハ白糸の  
滝よ一青ととくまよ川の流れよなる早川の  
俄よハ甲州勢を防ふよの葉分の傳坊の



數ハ建圍婆の吹かせよめく思ふるもの  
あけしよよよあそびあそび何りと杖を夕陽の  
麓より

ちりちりさき 誹詠よききく改陀と名を

妙鳥の七尺ききや佛の座 白梵

笑へと吹り山の夕風 作者不知

玲々よ見よや尺余の春の雪 同

希一の目の目よ角をきく鹿 白梵

大野くつよ不より富士川のとり船よあそ

穴淵よりく富士の裾きく古跡見巡り  
人穴村よ宿を穴中の吟

人穴や洞あしよ習よ泥の圃

寒氣肌を切るくく蘇生の心地

家よゆりぬぬれハ沼津よ宿り伊豆の

山とさきく川條蛭々小橋とんま

志田と市ヶ塚

ゆるく散る桂や山の下をれ



金輪涌出の嶋より遊しと首とめくせき  
 くのる根の白雪ハ大山の渾のそひり  
 伊豆の崎くハ波の房めく見も鎌倉  
 山よゆる弓をり月ハ七里濱より  
 せきく清くしる海あよハの字をせり  
 若石子さるく鳥の声窓より苗をせり  
 せきも凡あつた魂感しと苦らくと折む  
 欄干よあ

礎の亀も浮らん岸の波  
 角てのうらんとまむるよ主名跡と惜しく  
 倭越あくと送る

ころよ入るのふれやまて志ち  
 梅子

まゆゆくよひきの重まむらん  
 片瀬の竜口舎よ入く首の産の跡よ衣と  
 ちほる  
 白梵

太刀立の倒れと跡や雉の声  
 うきくともく七里濱の荒磯とけぬひ



いふ村の清と右は仰く極樂寺の切色と  
越一星月本の井よ疲れとあましく

ふあぬ井戸と眼けも星月夜

宿屋寺よ入く土の露と見る

くよ撞けくくく土の露

霊山ヶ崎袖の浦妹春川を渡り由井ヶ濱く

出く雪の下よ登るゆれハ八幡宮と拜む

御造営ゆきあゆく諸社玉とみくらき

朱の瑞籬神くあまよ源氏山の松戸が

萬歳の言をなせり

海を志まるとあまや一かき

清名亭よ今般系賀杖杖とるよ終お

誹談をなせり

向梵

田氣の一棒をゆくくくが

我慢の角をゆきく味本丸 般系賀

建長寺よ何と

月花やむいもあぬ位牌を

葛西ヶ谷東勝寺の跡と見るよ北条九代の



宗元一門はあまのく名のそびり——まの村  
いとあらん

誰くの腸のうら——木丸の花

富山屋敷は初梅と見く

片あらく謠のうらや花のりく

比木ヶ谷の精舎あり

大業の花や実極のそ百年

何んま堂

孤梅や瑛魔の息の塗舎り

小代衣坂子かり尼の心をとましく戸塚

出るも夜はほろや子宿をあるま子雨丸

強くおのめもあうぬほし子相宿し

旅人まがく逗屋を丁百姓われは山伏を

きぬの中は子安衣（乳母）おるところ

女子親とおの——さきの身をひく何る

やらし終日園浄ありうらさきま——

ゆらゆらゆらゆらゆら

月ハ水——覗きの箱の地獄餓餓



六江の渡——より池上より清く今や東武の  
船系業——よりあさる目をおさる——ぬ

衣さ——せみふく——何を花の時

女子養う湯湯天神より見おろし

屋根よせくを海よ今ん種月

新入る——きのをまの比

うけらふよ賣多ふ人あり放——奥

上野——様

中堂の腰より下ハさるる

角田川

水人の目より川を柳のサトウね

深川の翁の墳前よ合掌——

花よ浦を虫悪く——塚の神

羅漢寺

舟渡りもや立家の離を目八分

梅包——

這梅よちと贅棚はなうらうら



亀井戸のあはれ

味醂酒よらる物あはれおめ

尚梅子の亭はつらふけ人のさむむらさきの  
あめぬ家継もくろ石香の志は長娘の  
魂を洗ふ

梅う香よつぎはさきや蘭を待

心園子は東行の暇をせしはさのふ今日  
かよ今又奥の餞別を待る

つれもと蚕の盆や安楽世界  
白梵

雁一社日の多のくらひ 心園

残壁箴

夫我道はむら草莽の異なるかたより  
起るく神の代をさす一カ葉の比も隆  
行れあり其まなくハ山水のほく流るハ  
和歌のくちあその廣太なるはもさりり  
ゆらゆらの地下に至りてハ守武貞徳ゆら  
其上下を定免善く世はむらう十露盤  
睡るふ代斧を研杵あはれゆらひやまき



道とハニリウキルルモ理屈のうさん為ち  
淡林の突おき向こえよおりーと正凡の  
大道師出く木槿古池の句たり娑情の  
眼ハシクさき免ありけお滅ーあひくちり  
時ハシり誹諧をよれくけり色の句作き  
唐人の形云とやいん又ハあましく正凡をちるの  
徒ハ猿蓑炭俵アソあり流行變化のたを  
あしきさるゆハあしよ単ハ言りく鬼神ども  
感セー免猛きんを和くくるのたを喧嘩の

道具よ用るんも何さあーま世の何うさあれ  
大人ハちちよ抱ひあけ虚實中央の床ル  
座ーく曲ようさあし地よ屈たうんよハ  
正凡無盡の句作りかきり何るあし

月花の中ちち唐ー凡の脚

東氏の娘よ妻を向く衣之ハいと安うりり

魁こ本ま裾うろ綿や衣うん

卯月二日飛鳥山の花よ句を好まれ

あしうろよ極くけり凡のあさあ



卯月八日會

其の拙先が免させ川誕生會

白梵

初詣くき月のおさめるはと 梨旭

蚊屋を釣める下子弟女のちねとびく

澹く讀と好まれく

庭ぬ恋書る一問や其火鉢

梵足亭真行

白梵

大根の咄しよ整ん海と手紙

玲くくくくく娘のさしき 梵足

馬洲子とびく

虚山

せんくすけハとこめもけくまの時

そり茶の香サよ介る傘 白梵

蟬流亭真行

蟬流

蚊やりちや更く小家の雲原れ

轆る車くくく 暑ささささ 大外

表とそりく男う咄く 真うくく 白梵

大外亭真行

白梵

幣白くきくく飛や海さの



馬洲子を待つ

虚山

あつたけはとこめは待つては

そよ葉の香さふ介る傘

白梵

蟬流亭真行

蟬流

蚊やりちや更しく小家の雲隠れ

輾る車一り一暑有さ日中

大外

羨とそ有く男うはー真うう

白梵

大外亭真行

白梵

幣巾白く垂りて飛や海を



維六の方丈めち八万の流と集英白陽亭  
よハ家国のちみち一巻くつらよ

八郡の涌くや二階のまきくれ

春由よまきつりともあまむれく鹿陽に出ハ  
まのふし二日あまよ上野飛まの花も散り果  
杜鵑のきくくよ肝はあれ又まのくの奥羽よ  
おもむくものあのみがくくもさあちの所そ  
名あつりく残あの匂くよ袖をぬくま  
這ふ跡を文字よも債やがたぐり

草賀の松ふよなるの人をぬ抱く

涼一とあ人をあ一くこの顔

利根川の渡一船りく

ゆて橋を分ぬ大河や岸よ

中田くつふ取とま里計たよ入く大さくく

ころ古木の西り五抱計あつり謂まあ

くくあまあまああるよ鎌をくけあま

流りくは平親王將門都の土地を撰く

三所よよ本植られ一と内の一かあ



宇傳へぬれども賤しきあはれは會釈  
しゝふれはしゝを奥床へ跡とん送ぬ  
枝くハセ川の孰の養りか

室の八嶋は清く

蚊ハあし今も室戸の圍爐裏を

宇都の宮徳比らりの宿よ今く大燈國師の

任あひし傳法寺よ入る

白梵

内涼しさゆハ横は座禪石

新茶のまゆひ味をりか  
圖志

今日や日光の坊よ今く疲れをやまむ

神君の恩徳四海よあはれあはれ縦横の行脚よ

盗賊のおとれなさまけ山の御惠とらん

秋は洲の重石の山やハをま葉

三本杖

クまや梢ハぬれぬ杖の色

憾舎ヶ滝

瀧を吞む瀧や梵字の苔の花



重見の流

硝子のうちへは暮ら滝のうら

山とせし今市より奥州海道へ志しぬ  
ほくはく沢村とて所は宿る主は盲人  
テラシテうらふが固果ゆらん家く夫婦も  
目盲杖のちちめ子獨無とて下を  
るを求しうら月の片目はふれし僧の  
宿りあつても深き縁あり先浦経し  
前罪とちひあてはく後一代も

夕むあかぬへく一句を壁に張りし

うらまはれし時よ家内のと月圍

形はせし原を分く殺生石を見る

ふ塔子なうぬも柄や夏の草

蘆野へ宿へ出く乃を名この柵を見る  
年比の願うけらるる地し頭陀の剃刀を  
出しく清き子取おしむむおくや夕日ハ  
形はのこる根子うらうら丸彩柵の髪を梳る  
下は犬の法師の丈ふし肩脱ある水鏡の



家なうらおきらーりれハ

教法師の青子よりぬ減清水

尺蠖虫の大木を吃るころく今日や園の明神よ  
着ぬ是陸奥の始りれハ子松嶋に子入る  
心地ーくは行先のをき者をいひ

柏ふよあるる園や書る所

白川柏仙亭よ入る

押うけく泊るや園の夏鳥

いふはあふ祇の森

轉寐のころを目あや田く仇

あし川をせくるの大佛をおもふと云

所をさるるよは僧りくーとあさ衣士の馬に

より詞をうけらぬ跡先よ必行り

隔をさ身のいりありを修れハ仙臺より必

るぬーと名ところを念比く書る

渡れーそふらぬの因縁なるー我ハ

須賀川よあふりれハ再會をちりり

あふりよ二里をうりの道はれーも百年の



多しゆりく互うさしむさく一句を  
たかすのみ

おれ場の鞆魁せん其頭巾 白梵

袖の香のまろしハおれ汗ぬひ 馬蠅

須賀川晋流亭よ入

腸のまろりちうちや二月膳

或日三人山寺まむひく一巻を巻る

晋流

二月由の夢を運ぶや一宿り

かしこまのこし一ま林の亀 晋町

う尻の何とうろ大刀とく川せく 白梵

藤窮老人追善會

腹くまむさのみひ向や田く汎

浅香山よむさあそく

野覆盆子の乳房ふくち浅香山

かま林紅亭よ入るおろし壁を隔るち

香の露くしかりれハ

白梵

門の香も思塚近きまむさ

蚊きりあくるさむひのが 林紅



安達ヶ原と合く竹の玄窟と見る

形代やうきうきめれく塚の草

吾多太良の根へ伏す鹿のけりけり

のみか——万葉集のゆゑも今二本松の

嶽くくけりよけぬ虚説とのと玄窟と

吾多太良の五月雨白——羽鳥

高丸ヶ佳——大多鬼山の玄窟と見る

松明よ蝙蝠うけるやうな

松田と見る所をさく七夜梅野中の清きと

見く福嶋松雨亭よ入

松由子の閑庭よ一抱よあれる切株の土を

去るるの尺よさくさく中よあまのほのく

あまのけり般茶子う曲を求るの類よあけく

唯草末作りなる誹諧のたをえなせん

浦きおる白やあま葉の隠れ里

あまのけりあけく

蝙蝠の身をよ何とあのかん

あけくあまの湯よあけく此よあけく



ゆく比古へさ本あり一夜となく晝となく  
東西より飛ひ南北より鳴く  
奪らぬくも子に狂めく温泉よむいぬ首  
中よ浮れ見上れ八鬼つらう嶽の残雪よハ  
曙と川おきやん吾あを良れさひやまの  
燦とさうらむらうとく一四方よ人なく風  
大虚は初まかの多のおやをなくやあをぬ  
ゆれ行脚ありさへいとあをおむとらり  
おゆあよ下駄の音うらうくと甲へあ

白き客まあり右は一橋と提けたる盆を揚ぐ  
難波の野苅吾子々例の咳を聞おしめめ  
くげの罪とま見んとやかりの相宿りの中よ  
分くむ山ありつれハ岩上り膝を向く感  
泣き酔くあふ

もの穴は入むや温泉壺の郭一公 白梵  
ほくさぬ裸くやハおそれあり 野苅  
その声ぬくハ白くよかへん 翌車輪のとく  
なる物ありハ三益のゆらよはれん



赤壁よりいんたを河り 樹多 白梵

声の橋よりけり 郭公 野茂

霊山の方よりいづれはらうまの神あり

らる目よりいづれはらうまの神あり

石よりいづれはらうまの神あり

不動瀧

夕まや橋形よりいづれはらうまの神あり

この湯菅野氏十五丈の童の穴雅は志あり

山玉の号よりいづれはらうまの神あり

夏山や流黄の中の水の照

この湯をわく文字よりいづれはらうまの神あり

抱籠よりいづれはらうまの神あり

河ふくま川よりいづれはらうまの神あり

塵人亭よりいづれはらうまの神あり

男のあそびよりいづれはらうまの神あり

驢花亭よりいづれはらうまの神あり

ゆきり合水むきよりいづれはらうまの神あり

金驢亭よりいづれはらうまの神あり



いみじくの人ハ劔と横多し詩と賦一今の  
金駢ハ子と負うめく句を成をのれハ詩の  
姿よしとてハ誹諧のおくしとてん

おとり花後子負うる子息ハスユあり

水無月五日冬松亭子會

鉞の木塊乃んく少室うぬ

留別

ゆりそんま田の餅よぬる所

ま〜挨拶餞ふの句男も

保原と出く桑折の衣吹亭よ入る

大乘の同座一正風のちめと重ね

ぶ糸のち〜よあねや蓮の花

馬耳亭

夏草よ〜おぬあさやぶの跡

松嶋をい〜けハ又の契りと約〜とあ

國見の松記

陸奥伊達の郡藤田の驛東北へ入るる十町をう

か〜國見の松あり往古源義経奥より発向の



時此松了座——く執勢の多少を點檢せしめ  
そや見ると眼光を失ひ口開く因も東西二十  
三間も腹這ひ南北二十間も茂りく高七尺了  
——く西の大枝すめ——く地も肱付又十方も  
分身——く天も逆の風も吹く地を穿つ利  
國見の山流よりぬく葉ありき——震乃  
けりさぬ獅子の怒り毛をきり——く子儀  
おもむきの姿ゆ——南ハ——く優美子——く  
滝川の流れば葉をきり——新を——く

巫山の神女々々の樓よりわく——く東を  
茂枝よりゆりけりハ脊をきりありあらうか  
ハ川の酒瓶を居へ並ハ——く入船きの姿  
顯然あり北の枝ハ物より老あり鶴よすれり  
客あり——く此路も葉おや煉分——く都——く  
百枝百葉同——く——く普く世も——く  
松——くけ一方も及ん唐の帝の傘も  
官位をむさゆり鶴亀の盛り合より川れく  
嶋臺了時絶ハ——く腹ハ——く見る——く



まの河原しつりうも深く居れりか  
仙容をありちりるをゆい本中国に聞へり  
行脚をり目やうぬもわれハ下和ら玉よ  
ありくとほりちりるを言ふはぬま

這木の雲よ吼らや夏のゆ

国見山の腰を回るく伊達の大木戸を合

大木戸ハ五十四郡の茅の端が

鈴摺りの岩間を遍る

歩みれや衣の袖の糸糸茨

増田とう笠嶋道祖神をおむ下尊の神真猶  
鳥のりくも目なれぬま納よあひを催せ

錦木の裸ハ涼——道祖神

實方の塚

あろふみやあは夏草の一む初り

名え川を渡りく青葉の大府は入り朱滴

勇徳の二子ア會せ

大元は合せ鏡の茂りうが  
白梵

鶴のお門のききり中宿  
勇徳



須賀川あゝ内縁とむまひ——馬蠅子と  
るぬ病気快再會と後——

雨晴れくく人を色や鉄銀花  
白梵

待子甲斐ゆりそめの涼内  
馬蠅

拾之亭

夕立子眠る道ゆり糸のゆり  
白梵

涼内あゝあゝの竹一椽  
拾之

卍叟亭

楠の函とれぬ土用う那  
白梵

夏の海とくく其草の乃  
卍叟

如滴亭

ぬと延き足ハ池中——の莖  
白梵

——時あてもぬれぬ大蟬  
如滴

連中とらも城東のゆき山子會  
白梵

扇投く鶴作らちやあゝ石山  
朱滴

木くくく夏の青とら  
朱滴

貞條亭

片耳ハ市子渡とや其座敷  
白梵



團扇よ更る夕月のしげ 貞條

行程二百里を隔とんとよ雲龍の交りをつりく

息吹く八東へむくん雲の峰

松嶋の門おや送る風をさむくおひをよし

あまのこゝのこゝの下はくく岡をさるく宮城野を

見る

うやまのやまの月なると草のま

八幡とよ所をるく沖の井末の松山とるる

麥糠の波口惜くやす糸の松

紅葉山ありくくの栲野田の玉川と流る

塩釜の明神は詣く泉の三郎く鉄燈り

泪をちりく神宝の御釜を拜む

松葉散釜やう代をさるく

千賀の浦株人亭は會む

河の嶋は涼く火の河く塩煙

さあさあさあさあさあさあさあさあ

連中とるまは離る嶋は枝か

凡のうやまのさう嶋をさるく

株人

白梵



松島へ渡る

山川のなまじきを凌ぎて月あそ骨と透せし  
今日よ多し之を未ゆやゆありて頭を叩く  
たちよ延何うありて病よ無きなり見ゆは  
まるとはよさぬく整う行路のまじき又  
まじき頭れおるあそ何れやかくもせき  
う免考ハ僧ハ狂人あやと船政ハ何れ  
られぬ  
涼

船より何うして尾張屋とつる家よ宿る  
我う国の名のなまじきて何れも先祖ハ  
執田とうけしあくありて名字ハ大寺司と  
名をあるより乱世漂泊の人ありん  
松しき宿よまじきありとおゆ

一日瑞岩寺より何れひく法心和尚の座禪窟を  
見るぞこれまじき平四郎

清書の定や件の下流の何れ  
ちりし處をわく坪のふみを見ゆる



上  
碑也日さかりの楯國の楯

狩る館る平泉をこんと七曲とつふ所く  
物くくう一岡の山たををるは河里はを  
るある峠は松の茂りの徑をいあるう如  
里人のつるはつれを栗原をさまの郡境  
めく秀衡は代ちりの松あ伐採はうを  
そむの景色はをさおあく日のあるを  
まうま

はとあし奥の松を教る松葉

古川にあくの松をるくつひの松を見る  
ちつとた伐採りく植を松もいとあうひく  
都のはてめく瀆一もおひかられうり  
金成の山を分く吉次あちう五輪を見ア岡へ  
かくく山の目も宿るゆれハ高館平泉よ  
あもふくうくのうりやぬ目前は古翁の行脚  
去まうりまさくをる

圃へーハは其草う夢う川

諸堂を順礼ー光り堂の内をおく三代の



尊骸今猶歷くあり

風の香の涌き所より巻柱

坊中よりてがきねく

辨慶ハくも破とく冷一瓜

高館とせく達谷ク窟と見えくも悪路王

赤頭の大君遊宴の所之くつけくける姫侍ク滝の

何と狩りく高四十丈余りの盤石を穿堅固の

かましくも詞あり

一川華ぬ其も寒乞<sup>ソゲ</sup>之山石の奥

両首退治の仔ハ毘沙門の道場となりく

尊像ハ古ひあり照れハ霧山へ信を同行の

まゆ<sup>とく</sup>柱杖は紙を切つけあもあけ

誠一<sup>ノ</sup>首領のむ城ともいふゆ<sup>く</sup>一二三乃

木戸せろく大山縦横は切ぬきあり折く

其夏の習ひとく夕立一<sup>ゆる</sup>く雷ぬるハ

同行のいへるハ鬼の住一<sup>う</sup>くあれくや

荒るちんと口くよえつるをさの鬼とな

もさくあひくも大人の剛強か山居せ。



姿のおもろくけおを鬼とやらふり  
めしとくハ坊ハむしをささる人あり  
まうとせやしくは様様をさうしく  
其ククマヤ鬼のうく菓はひり  
えれより荒濱島の海等の古跡を見く  
海田の里稲波亭は入る水は月比孫はうり  
——も今の對話をよけうふ  
——川社や所くまのまの蠟  
物ら田の驛をさうく京沢へ志く小坂峠を

越——く枝木岩を見く五六丈の岩壁は  
筭木といつる地を編くうけあううしく  
五色大小むむななきのりさぬいうる天工  
此火をむせらや

須彌山を土圖に見く日や秋の色

亀ヶ岡の文珠は清く

手よしけくめうけあさん松の露

京沢より十里亭は頭陀をさあま

紫竹の脊中も白く軒の萩  
白梵







小松村押曲亭子入

おろくの戸あつたるは橋のた

宮村湖竹亭

白梵

一夜病く杖はふるると笑うらん

芭蕉のうけは面白く雨

湖竹

澤口以雄亭

おろく羊ふせも松の月

楢岡棹歌亭子入

楢を楢うらむ秋の面

大石田とつる所より最上川のつり船

舟のちうち萩の花兩岸より影りうらハ

船の病くひらきおは萩の花

白糸の瀧

盤石をよみ繫ぐや滝の水

坂田薄龜亭子入

白梵

帆柱をよむむらりや袖の浦

大盃を楢うらむ

薄龜



仁ら亭

七人よあちもたれし行のまら

白梵

新酒の酔の草よらめら

仁仁

百如亭

何の樹ハ皇子よははく鷄取花

白梵

捧く出る猪口し慕の穂

百如

津重の主何くもめよ神あまを造言奉納を

とらぬ

神明宮奉納

守らんの挾<sup>サキリ</sup>霧よ涌う神路山

象浮へ杖を引六里の砂乃

琵琶きこぬ長砂の旅や秋の照

大師崎の岩道

初沙やほりよゆり込波の音

有哉無哉の園

もやまを枝おろくサ秋はあらん

さし鳴の大蛸イ題を

芋と堀る我も仲あそ一丈蛸



蚌浮宇角亭は入る疲れをとりて一筆写の  
夕影は望む誠なるが祖翁の漢感  
ふうらぬ九十九嶋はそくくの脚強くは  
~~~~~  
~~~~~の遺教腸を破る

蚌浮やうく男あく種のはれ

一日蚌満寺は抄ふ鳥海山の雪浮より六

浮のちりや雪の言根はゆる鱸

挨拶

奥吟ぬ客より川へ写の秋 宇角

蚌浮をわく湯殿羽黒は消きうれや聞ゆる

靈山あく山吹百合のなまめをくあるか

これもが刈萱のきををあるも見く四時一服の

詠は無言の折言戒を狂真深々れ

~~~~~む四重の如比は月山

慈覚大師の入定の地と云あるりある

山寺は指

~~~~~を~~~~~

山形桃仙亭は入るうれや千歳山の麓をれハ



山の名の千とせよあそび家の秋

白梵

城の大鼓より川吹

挑仙

冠津亭會

白梵

毬栗のちも母は流るる海なる形

神の鯉のたぐ月のおけ

冠津

十歩亭名月の會

白梵

名月や吐逆吐く音の海のも

袖よこもつる若草麦畑のち

十歩

一向專修の道場子會

まんと顔せぬ泥もや蓮の花

白梵

掃除の介はちのあそび

惠枝

名月小集巻頭

明州の津子東を暮らひ雲水の月の西の光を

うらもろよ内情の余詠めし

名月やゆりさげと瘦る孰法師

耻一川

山形の頬はちや秋のうら

山形をゆくなげ山小坂を越つ瀬の上



等舟亭よ入る茂草を文色よちりて  
今や對法の時をよりて

腐るまへハ動うぬ尻やまの宛

一日鯖野く醫王寺よ詣く佐藤兄弟の古塚よ

泣く

浄瑠璃よとれと泪や石の法也

葛の松原よ抱ひく

松茸の裾や志多き松の何と

連中とろよ飯坂の温泉よ入

法くととハ何とゆう温泉のさう

嘉峯亭會探題

舟よはくく山路ハ刈らぬ草

日夜の句事重々ハ畧也

保原へ川可川亭會

賣れ然る白や二夜さうり

易耕亭

いみくの大によ咲ゆ葉の

晝夜の句く巻畧也



二星とありある人さへ向ふよ我ハ温泉の山の  
式子とありれく不流の主とれを愛む  
葉山子めりありく禪をりりり

晴と祈の祭文

大なるひくく天よ向ひ恐れなく中これ由き  
国土の乳味之苗代水よきゆりてきて八里の  
長の不棧娘を垂し水と月の比志とくと  
降りおろく築路のうら切と愈々今兼月の  
下ありく由更よ入用なり初時雨の晴を

糸成よきくへとくくくさる虫降りゆく娘行を  
妨けらるや雨師をゆく壺に納く塩辛の棚よ  
双ぬ屋しさのくは守敏をさるく魚執池の  
龍王子さるくせん

降ととて更よハ深き秋の山

掛田へくく桃村亭

山ハ錦葉子枯んくけり

枕流庵記

天子あり地よりくはくを掛田の山半よ一滴の



井をもちふ夢 衣食調度ハあるよまをせく柱ハ  
苔み葉の彩色を用ひ屋根ハ氣の小便は度子  
まくれぬ雨漉を聞一喝の唾子乾坤のつくさを  
流一安積山の古道よ卧猪のおきら一夢あらし  
まむるを觀河の主とハさききり世にあらざるを  
好まされはうむくは管のおひめ一く好士の  
文色のるや 盤糸もあはよまらひつくかひやり  
捨るめりうくは夕日さし一込膳のくは東門吹  
花の匂ひをあらこひ靈山よ月あうきまおき

杖を携く露上よさぬあふり 住居あり無任の  
住ううおねひをま川めんよハげ庵子志子と  
暫頭陀の首の骨をもちむ

摺粉本も如意も動くは秋のれ

梁川志香亭へ移る

山麩の容ろくく川 お葉やま

巻く畧さ

桑折布川亭へ移る

大木戸の何れハ物ナ一くられな



野東亭の一軸を夜まで

夢へくよ富士よりくれくまうの亀

御奇亭

居眠りの表ハ市のむらうん

巻く畧さ

東ヶ嶽の白妙よ舊里のめうち子とあひやう

瀬の上とえおるよあ離のつひ狗を痛む

ゆる日を使へるよあくし雪の名

河川とつと所より鹿鳴くよある凡邪よあま

されく日記もあ先なるされハやうく三句を  
をふけあり

筑波山遥拜

行峯かうくむ流波のまられか

鹿一箇

風や沖く鳴りけり蒼山三ツキあり

浮洲

波の脉御燈へ色よ寒う那

よあへ、本曾路の詠とくつひーもくれけ



年の日數なほれハ又東海及とぬとるは富士の  
詠はたそはゆは魂われと原の茶店と半日の  
費とをなほ

冬うみや富士のふれはなほ

遠府よりとる再會と收ぬ

雪の岸をおゆきん十府の菰より

千里の獨行甚とく川里秋もくれと大呂の  
初はくくはハ尾の金城よき海れハまこりさ  
同士はとる集り松崎のさう快 鉶浮の何とん

腮のともはくもくもり 終る飽く白梵庵は冬を

南真よ羽打 茨子中よはまもるも皆心性の足る

所あるをくくさる長旅くはくと痛くもよく初く

一年のこる鹿をゆふ

雪ちくく屋根の透るも天の原

雨天の

車一多とあくく 老師の餞別の外  
略す



腮のちぢもくもくう 脛う飽く白梵庵よ冬雪  
南冥の羽打茂子中よなまもも皆心性の足る  
所あるをうさる長旅うまを痛くする初  
一年のふる鹿をゆふ

雪ちりりく屋根の透るも天の原

雨天の巻

事多しあしあし 老師の餞別の外

略す



示行脚辞

一 長途の急

一 雨天の歩行

一 夜道の山路

一 水出の川渡り

一 寒暑のら均

右五ヶ条ハ制まへきの身之此外天然乃病  
自然の死必しもうむ身も

餞別

予う旅行の柱杖とる州子もたろく

月花よ一尺角せ桑の杖

庚申仲陽日

月空居士







